



無常

京大出身の哲学者



からきじゅんぞう

唐木順三 著

流れる水、色褪せる花、はらはらと舞い落ちる枯れ葉……。このような移り変わる事象に対して、我々は表現しようのない哀愁を覚えることがある。こうした「常ならぬもの」への思いを人は「無常」と認識し、愛でてきた。この感覚は日本独特の文化とも言われているが、その一言に集約できるものなのだろうか。

本書は京大出身の哲学者、唐木順三が従来の「無常」の定義に縛られることなく、新たな解釈を探し求めた産物だ。まず、王朝時代の女性が用いた「はかなし」という語を「無常」の前段階として挙げる。その後「はかなし」が兵にとつての死や末法思想と結びつき、王朝らしい雅やかさが消え「無常」という語に変化した。しかし一般的には「無常」と評されるこの段階も、本書では完全な「無常」として扱われていない。感傷に浸り高らかに歌い上げようとする意識がある以上、それは「無常」ではなく単なる「感覚」の域にとどまる。では、いつ「無常」を意識から解放し、現実そのものとして受け入れるようになったのか。唐木の主張によれば、道元思想において究極の「無常観」が成立したという。

一方で唐木は「自分の解釈はひとつの『試み』」と明言し、読者に対しても「無常」の定義に縛られずに自ら思索するよう促している。

唐木は世界の中の「無常」について以下のように考察する。

——確かに「無常観」は日本独特の観念である。しかし、現実の世界は「無常」そのものだ。人々は社会の繁栄がいつか終わることを無意識のうちに予感し、漠然とした不安を覚えてきた。その不安を解消しようと国家や階級などに揺るぎないものを求め、挫折を味わってきた。もう人々は現実を否定せず、世界をありのままに受け入れるべきなのだ。このときに、日本独特のものと考えられてきた「無常観」こそが、現実を見つめ、世界を理解するための鍵となるはずだ——

諸外国との交流に際し、「日本のアイデンティティ」について考えることも必要だろう。また、古都京都で時を過ごす私たちの周囲には日本の文化を意識させられる物事が多い。本書を手がかりとして、日本の文化とはいかなるものか、世界をどう捉えていくべきか再考してほしい。(遊歩道)



あずきようかん

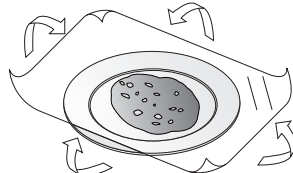
今回は簡単に作れるようかんです。冷やしてもおいしいですが、できたてあつあつもおすすめです。(ナツメ)

材料 (1人分)

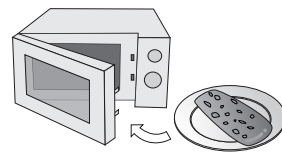
あずき缶	中1缶 (約160g)
薄力粉	大さじ4
水	大さじ2



① 材料を全てボウルに入れて、粉っぽさがなくなるまで練るように混ぜる。



② ラップを広げ、①をのせて折りたたむように細長く包み、ひっくり返す。



③ そのままレンジに入れて500Wで2分40秒加熱し、取り出して冷ます。

はみだし
すてーじ

あま〜い♥

→上の「あずきようかん」を作って食べながら、十人十色を読む……

(法・4 ぱんなん)
(あま〜い『らいふ』;編)